
いってらっしゃい

遠美 見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつてらっしやい

【Nコード】

N7190L

【作者名】

遠美 見

【あらすじ】

ハイネセンで命をとりとめたロイエンタールが、フェザーンへ帰って来て、エルフリーデと新婚生活を始めたばかりのころのお話です。

おかえり

時は新帝国暦3年1月半ば……………

第二次ランテマリ才会戦で重傷を負ったロイエンタールは、ハイネセンでの治療を終えて、フェザーンに帰ってきた。

もう軍には戻らないつもりだったが、皇帝はそれを許さなかった。汚名はこれからの働きで償え、というわけだ。

「ロイエンタール!!」

艦から降りると、ミッターマイヤーが駆け寄ってきた。あんなことがあっても、この友人は相変わらずまっすぐだ。そしてロイエンタールも彼を見ると、自然と彼にしか見せない顔になる。

「お帰り、ロイエンタール」

「……………ただいま、ミッターマイヤー……………」

ミッターマイヤーは本当はロイエンタールをあらんかぎりの力で抱きしめてしまいたいぐらいの気持ちだったが、さすがにここでは部下たちの目がある。かわりに痛いほどに彼の手を握り締めた。

ランドカーに乗り込むと、ロイエンタールは民間人用の宇宙港に行くように指示を出す。理由は言わなかったが、ミッターマイヤーには分かっていた。

二人を迎えに行くためだと。

宇宙港のロビーは、再会を喜び合う人たちでにぎやかだった。

そこに軍服とマント姿で入っていくと正直言っただけかなり目立つ。人目を引いているのだが、この二人はそんなこと気にするわけがない。

ロイエンタールはソファアームに座っているエルフリーデを見つけると、「おい、帰るぞ」とぶっきらぼうに声をかけて、エスコートするわけでもなくずんずん出口のほうに歩いていく。エルフリーデも黙ったまま、あとに続く。

ミッターマイヤーはやれやれ・・・とため息をついた。自分がこの宇宙港で妻を出迎えたときは「エヴァー！」と大声で呼んで、熱烈な抱擁とキスを贈ったものだが・・・と思いだす。

他人から見ればそれも充分変だと思うが、それはおいておくとして・・・。

とにかく帝国軍の双壁と呼ばれるこの二人の元帥は、仲が良くせにやることなすことが正反対なのである。

ロイエンタールの胸の傷は、この1月ほどで完治はしていたものの、念のために1週間ほど自宅で休んでから出仕することになっていた。

しかし、ミッターマイヤーは早くも不安になっていた。車まで行く道中にもこの二人は一言も話さない。エルフリーデは二人の間に生まれた息子を抱き、わずかだけれど手荷物があるというのに、ロイエンタールときたら持ってやるうともしないのだ。息子は去年の

5月に生まれたときいているから8ヶ月。ずっと抱いているには少々きつそうな大きさに思える。見かねてミッターマイヤーはロイエンタールを非難した。

「卿には夫としての気遣いはないのか」

「ない」

99%予測していた言葉だが脱力する。

「荷物を持ってやるとか・・・」

「女物のバッグなんか持てるか」

「だったら息子を抱け！！ 重そうだろうが」

「ああ・・・そいつあまり離したがらないんだ。どうしても抱けないとき以外はたいてい抱いている」

もちろん、他の人間に抱かせるなんて絶対嫌だという始末だ、前からそうだったが可愛げのない女だよ、とロイエンタールはちらりと後ろをついてくるエルフリーデを見る。

「よつほど、怖い目にあっただらうな」

いつもと変わらない淡々とした口調だったが、ミッターマイヤーにはそこに少しの情が含まれているのが確かに感じられた。この休暇の間に互いが夫婦として少しは打ち解けられるといい。

そう思いながら彼は2人の乗ったランドカーを見送った。

555

なつかしい人

ロイエンタールがフェザンで使用していた屋敷は、もともと親子3人で住むのにも十分すぎるほどのものであったので、そのままその家を使うことになっていた。

ランドカーが家の前に止まると同時に、ドアが開き、恰幅のよい初老の女性が駆け寄ってくる。エルフリーデはその女性が誰か分かったとき驚いて思わず大声でその名前を呼んでいた。

「マノ!!! ほんとにマノなのね?!」

「お嬢さん・・・お帰りなさいませ。まあまあ、よくご無事で・・・」

マノはエルフリーデを抱きしめるとおいおい泣き出した。エルフリーデは思いがけず再会した懐かしい人に驚きながらも、嬉しそうだった。

マノはまだエルフリーデがロイエンタールに囲われていたところに何かと面倒を見てくれた家政婦だった。意地でフェザンについてきたものの、外にも出られず沈みがちだったエルフリーデを、いつも心配してくれた。

フェリックスを妊娠したときも、妊娠したことさえ分からずに途方にくれていたのを励まして身体をいたわってくれた。

1年前、憲兵隊が踏み込んできたときには、すりこ木とフライパンを武器に隊員を撃退しようとし、エルフリーデはマノまでつかま

つてしまつからと慌てて止め、自ら憲兵に身を預けた。そのときから彼女は、エルフリーデを守りきれなかったことをずっと後悔して無事を祈ってきたのだ。

そして今日、幾分やつれてはいるものの、無事に身二つになり、ロイエンタールとともに帰ってきたエルフリーデを見て、嬉しくてたまらなかった。

「本当にようございました、おなかの赤ちゃんもご無事で。お元氣そうな坊ちゃんだこと！！ お名前はなんとお付けに？」

「・・・フェリックスと付けたの」

「『幸福』がお名前だなんて、なんとお幸せなお子様でしょう！ きつと、お名前のおり幸福にお育ちになるにちがいありませんよ」

泣き笑いのくしゃくしゃの顔でマノはフェリックスを抱きたいと言った。エルフリーデは今までのかたくなさが嘘だったかのように自然に子供をマノに預けた。

ロイエンタールは驚いたが、この家政婦を探しておいた自分の判断に満足して少し笑った。それを見たものはいなかったが、彼の人柄を知るものなら首をかしげたに違いないほどやさしい笑みだった。

マノが何日か前から帰宅の準備をしてくれていたので、家はさっぱりと掃除がしてあり、そこに花がいけられていた。それはこの家に残っている暗い部分の記憶を忘れさせようという彼女の気遣いだった。

「お疲れになったでしょう。おいしいお茶を淹れましょうね。お嬢さん・・・いえ、奥様のお好きなフルーツケーキを焼いておきましたからね。坊ちゃんにはバナナがありますよ」

なんとまあ、にぎやかな女かとロイエンタールはため息をついた。女3人寄ればかましいというが、この女は1人で3人分しゃべるらしい。自分にはあまりしゃべらないエルフリーデがちょうど良い。

そんなことを考えているとキッチンのドアが開いてお茶の仕度をのせたトレイを持った女性が現れた。その女性の顔を見てロイエンタールは指を指した状態で固まってしまった。

「・・・・・・・・アンナ？だよな・・・・・・・・？」

「はい、オスカー坊ちやま。お久しぶりでございます。ひどいお怪我をされたと聞いて、たまらずに飛んでまいりました」

エルフリーデは、誰？と訊いた。

「・・・・・・・・俺の乳母だ。10歳で幼年学校に入ったからそれ以来会っていないが」

「奥様ですね。初めましてアンナと申します。まあ・・・生きているうちにオスカー坊ちやまの奥様とお子様を見るのが夢だったんでございますよ。かわいい坊ちゃん・・・オスカー様の赤ちゃんのころのお顔にそっくりですわ！！なんと嬉しいことでしょうねえ・・・

「・

マノとどっこいどっこいのやかましさに頭がくらくらしてきた。

記憶ではこの女は必要以上のことは話さない人間だったと思う。仕事は完璧にするが、冷たい印象があった。しかし今では子煩悩な普通のおばちゃんである。年月が人格を変えたのだらうか？

「あら？ 坊ちゃん、オムツが濡れていますね。こちらに用意してございますから換えましょう。……んまあ、こんなところまでオスカー坊ちゃんのお小さいころにそっくり！！ 親子って似るものですねえ〜」

ほほほほほ……という女たちのにぎやかな笑い声を聞きながらロイエンタールは頭を抱えた。どこが似てるって？あの女ども
おおお！！

今ならもういっぺん貧血で死ねそうな気がした。

つづく

アンナの涙

エルフリーデは、始めのうちはアンナになじまなかったが、2、3日たつと警戒心もなくなり、普通に接するようになった。

マノとアンナがすっかり意気投合していたのが大きかったのかも知れない。年も同じくらいでおしゃべり好きの二人は、まるで何年も前から知り合いだったように仲がよく、エルフリーデも二人につられておしゃべりをしたり、笑顔を見せたりすることが多くなった。

やかましさには辟易するが、それはロイエンタールにとっても好ましい変化だった。もつとも、本人はその感情に気づいていないし、気づいたとしたら「度し難い・・・」と言っだろう。

妻が楽しそうなのが嬉しい・・・だなんて。

アンナは過剰なほどフェリックスの世話をしたかった。世話をするだけでなく触れるたびに軽いキスをしたり、ほお擦りをしたりとまるで猫の子のようにかわいがるのである。

ロイエンタールは冗談めかして、お前、俺にはそんなこととしてくれたことないじゃないか、と言った。本当にからかうように軽い気持ちで・・・

アンナは激しく泣き出し、そこにいた全員が驚いていた。

「仕方なかったんですよ・・・」

と、アンナは泣きながら話した。

「旦那さまは、オスカー様に優しくする使用人は首にしてしまうんですから」

実際何人も首になったのだという。そういえば……と記憶をたどると確かに自分が好意を持っていた者がいつの間にかいなくなつてガツカリしたことが何度かあつたような気がする。

「私だつて……ご両親に疎ましく思われているオスカー様が不憫で、可愛がつて差し上げたかつた。でも、そうしたらお屋敷にいられなくなつてしまつてしょう。だから感情を殺して……せめてしっかりとお世話だけでもと……」

ロイエンタールは思い出した。愛情は得られなかつたが、10歳で家を離れるまでに生活の面で不自由を感じることは一切なかつた。めつたに風邪もひかない子供だつた。それはアンナが食事や衛生に気を配り、暑ければ汗をふき、寒ければ上着を着せた結果だつた。

ただ、その手のぬくもりを感じ取るにはロイエンタールは幼すぎたのだ。

「本当に、こんなふうにしてあげたかつたのに」

フェリックスを抱いて泣くアンナをロイエンタールはただ黙つて見つめていた。

一夜がすぎると、アンナは元のにぎやかな女に戻り、皆も昨日のことには触れないようにしていた。ただ、三人の女たちの仲はまた一段と良くなつたようだつた。

今日は朝からキッチンで何かやっている。どうやら、エルフリーデに料理を仕込むつもりらしい。

あの何にもできないお嬢にどこまで仕込めるのか見ものだが、本人が意外にも楽しそうにやっているのだから簡単なものぐらいはできるようになるかもしれないと思う。

断っておくが、別に楽しみにしているわけじゃない!!

問題は、その間、俺がフェリックスの面倒を見ないといけないうてことだ。まあ、まだ歩けもしないし、寝ているかそのへんを這いずり回っているだけだからいいが。

「ほんとに見てるだけしかしないぞ」

と宣言して、ソファで読書をしながら、時おりワインをやりつつ、横目で息子を見ている。

そばによつてくれば、足の先で相手をする。

泣き出したら、泣いてるぞ、と誰かを呼ぶ。

タメイキをつかれるが、無視する。だって見るだけと始めに宣言したのだから。

きりのいいところでいったん本を閉じて、んんん、と身体を伸ばす。もう傷もすっかり治って、どんな動きをしても平気になった。あと2日休暇はあるが、こんなことをしているぐらいなら、明日からでも出仕したいくらいだ。職場のほうがよっぽど静かであることは間違いない。

あくびをしながらふと息子を見ると、なにやら妙な動きをしている。手足を床につっぱって、しきりに尻を持ち上げている。

まるで尺取虫だ………。

我が子にむかってなんといい草か！！と言われるような感想を口にして、俺は息子を珍しくまじまじと見たのだった。

………ひよつとして、立つ気なのか？

そう思ったとき、ロイエンタールは思わず握り拳を作っていた。自然に体がぐつと前かがみになり、どこからどう見ても「たまひよパパ」である。

「………よし！　そこでもつと足に力を入れるのだ。………あゝ、おいしい！　がんばれ、フェリックス」

と、独り言まで言っている。

フェリックスの様子を見に来たエルフリーデは、あまりにそのロイエンタールの様子が面白かったので、ドアの隙間から笑いをこらえて見ていた。しかし、フェリックスの手が一瞬床を離れたのを見て「おっしゃ！！」と言ったのを聞くと我慢も限界を超えた。

エルフリーデの笑い声ではつと我に帰ったロイエンタールはドアのところでおなかを抱えて笑い転げているエルフリーデに気がつき、カーツと赤くなった。

「貴様、いつからいた！！」

エルフリーデは笑いすぎで答えられない。くそっ！と悪態をつきながらフェリッククスに視線をもどすと、ひとり立ちに成功して得意げな顔をしているではないか！！

「…………お前のせいで立つ瞬間を見逃したぞ！！」と怒鳴ると、もっと笑ってしまい涙までこぼしだした。

まったく、ムカつく女だ。今夜おぼえてろよ…………。

その後すぐに、一歩踏み出そうとして転んで泣き出したフェリッククスをエルフリーデは抱き上げてあやした。ロイエンタールは「がんばったな」とフェリッククスの頭を撫でた。

なんとなく、家族らしくなってきた今日この頃である。

朝の風景

休暇が終わり、出仕する日の朝。

ロイエンタールは着なれた軍服を身につける。マントを手に取り、うとすると、エルフリーデが先にとり、後ろから着せ掛けてくれた。

こういうとき、なんと言ったらいいものか・・・二人ともわからなかったので、無言のままだったけど。エルフリーデにしてみれば少しは妻らしいことでもしてみようかな、と思って、昔、母が父にしていたことをやったただけなのだが、ロイエンタールがあんまり意外そうな顔をしたものだから、一気にその場がぎこちない空気になってしまった。

双方がしまった、と思ったがもう遅かった。変に意識してしまって、互いの目が見られない。

「・・・・・・・・・・行つて来る」

「いつてらっしやい・・・・・・・・・・」

同居していた時期はあつても、こんな挨拶を交わしたのは初めてのこと、なんだか気恥ずかしくてどちらもうつむきがちだった。エルフリーデに抱かれたフェリックスは、不思議そうにその様子を見ていたが、ロイエンタールが部屋を出ようとすると、

「あー！ー！！」

と大きな声をあげて手を伸ばした。ロイエンタールとエルフリー

デは驚いてフェリックスを見た後、互いの顔を見合わせて笑った。

「……行って来る……いい子にしているよ」そう言う
うと、ロイエンタールはフェリックスに右手を差し出した。

フェリックスはそのひとさし指を握って、かわいい笑顔を見せる。

その笑顔を見ると、二人の顔も自然に笑顔になった。

「いつてらっしゃい」

エルフリーデが今度は笑顔を向けて言った。

ロイエンタールはその笑顔に魅せられて、答える代わりに触れる
だけのキスをした。

一枚の美しい絵のような朝の風景だった……。

END E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7190/>

いってらっしゃい

2010年10月14日15時54分発行